

(23)

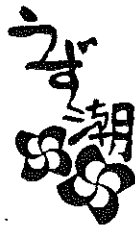
オピニオン

(第3種郵便物認可)

機内の照明が落とされ、隣にいる男は静かな寝息をたて始めた。ニューヨークへ向かう飛行機の中でこの原稿を書いている。ニューヨークまで後9時間ほどある。最終的にはニューヨークを経由してハイチへ飛ぶ。

ハイチでは2010年11月以来、コレラが流行している。死者は2千人を超えた。感染者は8万人以上と推定されている。昨年1月に起きた地震によって住む所を失った人の多くが、その後も仮設のテントで生活しており、安全な水、清潔なトイレへのアクセスを失ったことが、コレラ流行の土壌となった。

ただでさえ厳しい環境での生活にコレラが加わった。国連平和和維



やまもと たろう
山本 太郎

会に緊急声明を出した。「ハイチのコレラに対し、医師と看護師と物とお金が足りない」と。そのアピールにこたえるためにハイチへ行く。かの地でコレラ対策を行うためである。

そんなハイチの状況に備えつつ、今、飛行機の中にいる。飛行機の中では、そんなハイチの状況とは異なるゆつくりとした時間が流れる。忙しく、走り回っている

創造的休暇

持軍に参加しているネパール兵によって、コレラが持ち込まれたといった伝聞が広がり、生活苦とあ

いまって不穏な動きが高まっていると聞く。国連事務総長が国際社

日々がうそのような時間だ。ふと一つの言葉を思い出した。創造的休暇。

17世紀、英国を襲ったペストによって、大学も休校を余儀なくさ

れたことがあった。大学に籍を置いていた一人の青年も故郷へ帰ることにあった。本人の意図とは別に、故郷である田舎では、何もないが、静かでおやかな時間が流れていた。その時間が青年に思索の時を提供した。青年は、微分法や万有引力の発見につながるアイデアをこの時期に得た。それ以来この時間は創造的休暇と呼ばれることになった。天賦の才に恵まれたものに許される休暇に違いない。

凡才の徒は数時間の後、再び、日常とはいえないかもしれないが、目の前にある嵐の中に戻る。それが似合っていると思う。ハイチは1年ぶりだ。

(長崎大熱帯医学研究所教授)